

特別支援学校での体育実践に関する研究

－主としてサッカーを単元とした場合－

村上 貴史 (岩手大学)

1. 目的

本研究は、知的障害者である生徒に対してサッカーを単元とした体育の授業を行うことの有効性を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者 I特別支援学校中学部生徒 17名
- 2) 調査方法 全8回の授業実践をチームティーチングで行った(表1)。

表1 本単元の授業構成

1・2 時間目	3～8 時間目
整列・挨拶・インストラクション・学習カード記入・準備運動	
サーキット形式のドリル	サーキット形式のドリル
	メインゲーム ・試合形式のゲーム ・ダンボールシュート
整列・学習カード記入・ふり返り・挨拶	

生徒が記入した学習シートと、指導を担当した教師が記入した評価シートを用い、生徒の「授業毎の意欲自己評価」とシュート、パス、ドリブル、ディフェンスを対象として、A,B,C 評価を行い、3点満点で得点を算出した。

- 3) 分析方法 生徒の「授業毎の意欲自己評価」とシュート、パス、ドリブル、ディフェンスのそれぞれ「生徒全体の平均得点」を算出し、メインゲームを行い始めた before(3日目)と最終回の after(8日目)を比較した。対応のある t 検定を行い、危険率 5%未満をもって有意とした。

3. 結果と考察

授業の有効性を測る指標として設定した「授

業毎の意欲自己評価」と、四つの技能の「授業毎の A,B,C 評価」の合計 5 項目のうち、シュートの「授業毎の A,B,C 評価」の向上が有意傾向にあり、その他の項目には有意な差はみられなかった(表 2)。

表 2 各項目の平均得点の推移

	3 日目	8 日目
意欲自己評価	2.63 点	2.75 点
シュート	1.88 点	2.29 点
パス	2.06 点	2.24 点
ドリブル	1.76 点	2.12 点
ディフェンス	2.00 点	2.12 点

しかし、「授業毎の意欲自己評価」が高く推移していることや、四つの技能の全てで平均得点が向上していることや、松坂(2017)が特別支援学校中学部や高等部の生徒が学習によってサッカーの個人技能を習得する可能性を示していることから、サッカーが特別支援学校においても有効な単元であることが示唆された。

4. 結論

本研究では、特別支援学校中学部生徒を対象に、特別支援学校におけるサッカーを単元とした授業の有効性を検証することを目的とした。その結果として、今回行ったサッカーを単元とした授業は、特別支援学校の生徒が高い意欲をもって授業に参加できること、サッカーにおける基本的な技能も習得できることが示された。

5. 主な参考文献

- 1) 松坂晃(2017),「知的障害児の運動技能習得に関する研究：特別支援学校中学部におけるサッカー授業実践から」『茨城大学教育実践研究』,(36), p.323-329